

諏訪 浩（東京大学空間情報科学研究センター・
立命館大学歴史都市防災研究センター（客員））

はじめに

前回(2010年の研究発表会)は、京都盆地東縁で起きる崩壊や土石流について、最近の事例と弥生前期に起きた事例とを対比しながら、京都盆地東縁における土砂災害環境を検討した。今回は、近世の事例にも光を当てることにする。

御蔭神社の水災と震災

前回の報告のうち、1970年代以降に起きた斜面崩壊や土石流事例は、凡そ30年に一度、すなわち比較的頻繁に起こる大雨で生じていた。斜面崩壊や土石流は場所を変えて起こる。このため、一地点について見ると、頻度は小さいため、過去の被災経験が風化してしまうことが多い。

被災経験が風化することが多い中、200年ほど昔に起きた洪水氾濫や土砂氾濫による被害の様子が絵図として残されている事例がある。比叡山南西麓にある御蔭神社の被災例である。御蔭神社は、ユネスコ世界文化遺産「古都京都の文化財」の一つに登録されている下鴨神社(正式には賀茂御祖神社)の摂社である。比叡山東麓御蔭山の山裾にひっそりとたたずむ。江戸時代の、宝暦8年(1758年)豪雨と文政13年(1830年)地震による被災の様子が絵図に描かれている。

神社立地と天変地異

御蔭神社がある御蔭山およびその周辺は、いくつものスプーン状を呈する崩壊地形に取り囲まれている。文政13年京都地震では、比叡山西峰で崩壊が起きて、神社に隣接する谷川と御生川が埋没した。そして高野川に土砂が流れこみ、川の流れを堰き止めた。神地や社殿も土石流によって埋没するという大きな被害を受けた。また、宝暦8年8月台風豪雨では高野川と谷川が氾濫して、

御蔭神社の神地が埋没し、^{みずがき}瑞籬と社殿の一部が流損している。それ以前にも、8世紀以降、花折断層や琵琶湖西岸断層帯を震源とする地震あるいは大雨に際して大きな山崩れに見舞われてきたものと思われる。そのような激甚な天変地異に見舞われる地であることが、この地をして“鴨の大神降誕の地とされ……”と成らしめることになったのかも知れない。平素は豊かな自然に囲まれた

土地も、時には海割れ、地裂け、あるいは山暴れるという宿命を負う土地は多い。そのような場所が、大神降誕の地とされていることも少なくない。

里山の土地利用と土砂災害環境

斜面崩壊や土砂の流出は地質や地形に規制されるだけでなく、斜面の植生、とくに森林の有無やその状態によって規制を受けることも少なくない。山地の植生が乏しいと、地中への水の浸透能は小さい。大雨時には、地中へしみこめない水が川筋へ集中する。出水は早まり、短時間に集中するので、谷筋の洪水流量が増大して土砂移動が活発になる。また斜面では、植生の根系すなわち樹根のネットワークによる緊縛力が期待できない。このため、表層崩壊が起き易い。

日本の山々は、今は豊かな緑に覆われているが、昭和20年代までは禿げ山や植生の乏しい山々が少なからずみられた(例えば、千葉徳爾、1973)。人口増加と経済活動の拡大にともない、用材や薪炭を得るべく山地の森林が過度に利用されていたため。都が置かれた京都の周辺では、平安時代以降、山林はこのような宿命を負わされてきた。

室町後期から江戸末期にかけての、京都周辺の山地植生の状況がさまざまな絵図を比較することによって検討されている(例えば、小椋純一ほか、2008)。それによると、この期間を通じて、神社仏閣の周りの林を除くと、おおむね山地に高木の林は少なく、低い柴や草の植生部分が広がっていた。裸地化して禿げ山状態となっていたり、岩がむき出しになったところさえ見られる。これは、京都という大都市の近郊であったため、燃料や肥料などとしての草木の需要が大きく、近郊の里山が酷使されたことによる、とされている。

参考文献

(財)糺ノ森顕彰会(1985) 鴨社古絵図展、(有)糺書房。新木直人(2008) 葵祭の始原の祭り御生神事御蔭祭りを探る、(株)ナカニシヤ出版。
諏訪 浩(2002) 地すべり移動体の運動像とその特性：地すべりと地質学(藤田 崇編著) 古今書院、78-92。小椋純一ほか(2008) 京都の森の変遷：田中和博編「古都の森を守り活かす」の第2章、京都大学学術出版会。千葉徳爾(1973) はげ山の文化、学生社